コロス

第185号
令和8年5月1日
発行常民文化研究会

郵便振込口座
00280-9-12790

「コロス」とはギリシャ語Xoposで英語Chorusコーラスに当たります。
ギリシャ悲劇では十数人の合唱団として、演劇の進行を説明し、時には民衆心を代弁する重要な役割を果すものです。私達の心を反映する小さな場としてこの会詩を「コロス」と名付けました。

入会受付けについて

入会は随時受付し希望者は、事務所に葉書にて、住所、氏名、電話番号を連絡の上、本会の郵便振込口座（〇〇二八〇―九―一二七九〇）一年会費一〇〇〇円を振込み下さい。

書評／菅根幸裕著『近世・近代の俗聖と地域社会』を読む

西海（にしがい）　賢二

はじめに

著者の菅根幸裕（私のなかではいまだに三枝さんが頭から離れていないが）氏に初めてお会いしたのは1977年のことであるからもう49年前のことになる。ある大学の学部一年生であった彼と、同年大学院の博士課程に入学した時と記憶している。

さて、その後、彼の経歴を見ると1982年から㈱近畿日本ツーリストに就職され、その後1983年から84年は東京都板橋区立郷土博物館、1984年から95年は千葉県立総南博物館、1995年から2007年は國學院栃木短期大學、2007年から現在まで千葉経済大学の教授を勤められてきた。また、千葉県内の歴史学・民俗学・博物館學を牽引してきた方である。

その菅根幸裕さんが学会にさっそうとデビューしたのは記憶に定かではないが1979年10月まだ学部三年であったと記憶しているが「白峰村のお地蔵さん」（若杉温氏と共著・『はくさん』第7巻第2号・石川県白山自然保護センター編集）を上梓して、我々院生一同驚いたことを覚えている。さらに学部時代から柳田國男の弟子でもあった歴史地理学・民俗学の千葉徳爾先生の指導のもと、白山山麓の徹底した民俗調査を行い、学部卒業後、私個人としても驚くような調査報告書を提示された。

それが「白山山麓山村住民の袖乞慣行（考察）」（『中部日本白山山麓住民の季節的放浪慣行―牛首地区の事例を中心に』）国立民族学博物館研究報告8巻2号・1983年6月・人間文化研究機構国立民族博物館編）の調査報告に正直後輩の仕事に学んだ記憶を鮮明に覚えている。

その後、千葉県立の博物館に勤務の傍ら関西の京都をはじめ千葉県内の徹底した文献史学・民俗学調査を踏まえ多くの俗聖と地域社会のテーマに絞って近世・近代社会の位置を傍目でみていてもこれまでやるかと思う仕事を45年間以上地道に現地調査かつ文献資料にあたり、ついに『近世・近代の俗聖と地域社会』が上梓されたことを心から喜び賛辞を送りたい。

また、これまた偶然であるが、著者がその研究の発端になった研究者が歴史民俗学を牽引してきた萩原龍夫（1916年7月18日～1985年月19日）先生であり、かつ空也堂と空也聖の徹底調査のきっかけになったことは菅根さんにとっても幸運であったことはいうまでもない。

さて、著者が近世・近代の俗聖と地域社会の研究にのめり込んでいく時代の日本の古代・とくに中世研究が遍歴民に対して批判はありつつも先導していたのが網野善彦氏の一連の研究と連動することは認めざるを得ない状況があったこともあるだろう。網野善彦さんによると鎌倉・南北朝期には、遍歴民は餞視されていなかった、一遍聖絵などに一二九九年の乞食・非人は生気に満ちていたのが、それが一遍上人絵伝（遊行上人絵巻）十四世紀初頭になるとその動きが鈍っていたとの指摘があり、また、宗教学者の山折哲雄『乞食の精神誌』（1987年）『にっぽん巡礼―漂泊の思いやまず』（2010年）などの発言にも認められるがその状況下において、近世・近代の俗聖研究に新たな時代を迎える基本的文献が菅根氏によってまとめられたことに注目かつ賛辞を送りたい。

歴史地理学・民俗学・そして宗教民俗学へ

本書は、日本の歴史民俗学を牽引してきた菅根幸裕さんが近世から近代における定住する俗聖の実態を明らかにしたものである。具体的には、空也堂傘下の鉢屋・茶筅・時宗の末端にいた鉦打を分析したものである。

すでに俗聖について、講究したものは日本民俗学の創設者である柳田國男、婿養子の宗教学者堀一郎（1910～1974）らをはじめ多くいるが、いずれも為政者側の史料や地誌をもとにしたものであり、その俗聖そのものの史料を扱ったものはきわめて少なかった。俗聖側からの視点というのは、本書がはじめて試みたと言っても過言ではないだろう。

鉢・茶筅については、京都の本山であった空也堂の史料と茶筅側の史料を突き合わせて考察したものであった。

茶筅たちはそれぞれ定着した地域で主に葬祭業の一角を担い、またさまざまな生業を営みながら、生きぬいてきた。俗聖の最大の問題は身分の向上であったが、束縛された定住の生活のなかでどの